



橘 昌信先生（2011年撮影）

目次

橘昌信先生への追悼の辞	飯沼賢司	4
橘昌信先生略歴および主要業績		
橘昌信先生の思い出	清水宗昭	6
橘先生の優しさ	平尾良光	14
橘昌信先生との思い出	山本晴樹	17
—エーゲ海沿岸の古代都市紀行—		
恩師橘昌信先生に教えを受けた四年間	坂本嘉弘	19
橘先生との思い出	栗焼憲児	21
「豊後水道」	多田仁	24
我が恩師 橘 昌信先生	鎌田洋昭	26
橘先生との思い出	稲村秀介	28
橘先生との思い出	金丸武司	30
橘先生と周口店遺跡で石器調査	井上信隆	33
橘先生との思い出	林潤也	35

追悼文

橘昌信先生への追悼の辞

別府大学学長 飯 沼 賢 司

二〇一九（令和元）年五月二七日に橘昌信先生が他界されてから二年近くが経った。先生は、別府大学を退職されてからも名誉教授として大学の三一号館で同じく名誉教授の山本晴樹先生と一室をシェアされ研究を続けられていた。時には、元教授であつた平尾良光先生が東京からやって来ると、二人で海釣りを楽しんでおられた。亡くなる少し前から体調がよくなひとは聞いていたが、昔から体は頑強な先生であつたので、亡くなつたと聞いたときはとても信じられなかつた。

私は、一九九三（平成五）年四月に本学史学科の教員として赴任した。それ以前に史学研究の総会に招かれ別府大学で講演をする機会があつたが、そのときはほとんど挨拶程度で、赴任のときが橘先生との実質的な最初の出会ひであつた。当時、赤いスポーツタイプの車を乗り回すお洒落でダンディな先生という印象であつたが、それとは裏腹に意外にシャイな先生であつた。専門も考古学でも旧石器・縄文という分野であり、研究上の接点も少なく私も深く話す機会はなかなかつた。

先生は、北九州市の出身で、明治大学の大学院を出た後、一九六六

（昭和四一）年に史学科設立間もない別府大学に職を得て、すでに三十年近く経ていた。その間、学生部長等大学の要職を務め、その後は、一九九七（平成九）年に新設された文化財学科の初代の学科長も務め、最後は博物館長を務められた。この間、史学科で私が提案した共通テーマ研究（石の文化、磨崖仏の研究）などを通じて少しずつ研究上の接点をもつようになり親しく付き合うようになった。この共同研究が新設学科文化財学科の創設へと繋がつた。

文化財学科と別府大学大学院の創立は、史学科の創設者故賀川光夫先生以来の史学科の悲願でもあつた。私と後藤宗俊教授が中心となり、構想を練り、文部科学省との交渉に当たり、学科は橘先生が学科長として調整役を務められ、一九九七（平成九）年に学科創設された。これによって、別府大学は史学科と文化財学科の二学科で二〇〇〇（平成一二）年までには一〇〇〇名を超える学生を擁するようになった。

しかし、先生は、二〇〇一（平成一三）年の年明けとともに起こつた聖嶽洞窟遺跡事件で旧石器・縄文時代の研究者としてその渦中に巻き込まれ、しばらく苦悩の時期を送ることになった。私も当時二代目の学科長としてマスコミの対応の最前線に置かれるとともに大学内の混乱の中で辛酸を舐めた。事件は、清廉な賀川先生を自死に追い込む結果となり、橘先生は、事件の責任を感じられ三月には博物館長を退任された。その後、この石器ねつ造嫌疑の事件は、裁判を通じて一部マスコミの不当な報道であつたことが明らかにされ、報道したマスコミは雑誌紙面で謝罪文掲載を求める判決が出された。

二〇〇六（平成一八）年から開始された総合地球環境研究所のプロ

プロジェクト研究「日本列島における自然―人間相互関係の歴史的・文化的検討―」(プロジェクトリーダー湯本貴和)では、私が九州班の班長を務め、本学の教員および九州大学、熊本大学、宮崎公立大学の教員二十名以上を組織して九州中部に広がる草原をテーマに研究を行った。この成果は二〇一一(平成二三)年に湯本貴和編、責任編集佐藤宏之、飯沼賢司『野と原の環境史』(シリーズ日本列島の三万五千年―人と自然の環境史―)として結実し、傷ついた別府大学の新たな出発の一助となった。

この際、この研究では草原を維持してきた「野焼き」のはじまりが議論となり、故賀川光夫先生の専門であった縄文時代がその画期であることが明らかにされてきた。旧石器・縄文時代を研究されてきた橘先生はこのプロジェクト研究に加わり、縄文時代と野焼きの関係について熱い議論を戦わせ、研究者として同じ土俵で向き合うこととなった。私にとっては新しい研究の展開への契機となった。われわれは長い間、聖嶽洞窟遺跡事件を引きずっていたが、このとき、いつも飄々としていた先生が熱く語る姿を見て私も大いに刺激された。

あの頃からもうすでに十数年の歳月が流れた。共に熱い議論をした先生たちは去り、私の同世代も大学を去る時期になっている。史学科と文化財学科を統合した史学・文化財学科の主力の先生方も聖嶽洞窟遺跡事件を直接は知らない新しい世代に代わった。私は現在学長として次の世代への受け渡しを担う役割を与えられたが、私が何もいわずとも次世代は確実に育ってきている。

橘先生の追悼の辞を通してこの三十年近くを振り返り、あらためて

史学・文化財学科の発展、別府大学の発展に寄与された橘先生の御魂に新たな未来の展開をお誓いしたい。本年は、奇しくも史学・文化財学科の前身である史学科を創設された賀川先生の逝去から二十年目となる。大学院もこの四月から歴史学専攻と文化財学専攻が統合され史学・文化財学専攻として新たな出発となった。先生の追悼号を出すのが遅れてしまったが、このような時期に出せたことは先生もきっと喜んでくれると確信している。

橘昌信先生略歴および主要業績

略歴

一九四一（昭和一六）年
一月六日 生まれ

学歴

一九六四（昭和三九）年
三月 明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業 文学士
一九六六（昭和四一）年
三月 明治大学大学院修士課程文学研究科修了 文学修士
一九九七（平成九）年
一月 明治大学 博士（史学）

職歴

一九六六（昭和四一）年
四月 別府大学文学部助手
一九六九（昭和四四）年
四月 別府大学文学部史学科講師
一九七四（昭和四九）年
五月 別府大学文学部史学科助教

一九八五（昭和六〇）年

四月 別府大学文学部史学科教授

一九九六（平成八）年

八月 別府大学文学部教授、別府大学大学院文学研究科教授

一九九九（平成一一）年

四月 別府大学大学院文学研究科長

二〇一〇（平成二二）年

五月 別府大学名誉教授

非常勤講師

一九八一（昭和五六）年

四月 九州大学文学部非常勤講師

一九八一（昭和五六）年

四月 鹿児島女子大学非常勤講師

一九九〇（平成二）年

四月 岡山大学文学部非常勤講師

一九九八（平成一〇）年

四月 放送大学非常勤講師

一九九九（平成一一）年

四月 鹿児島大学法文学部非常勤講師

学内役職

文学部史学科長、文学部文化財学科長、大学院文学研究科長

所属学会

日本考古学会、全日本博物館学会、古文化財科学研究会、先史学研究会、九州旧石器文化研究会、大分県考古学会、北方ユーラシア学会

社会活動

大分市文化財調査委員会
大分市歴史資料館協議会委員長
亀塚古墳保存整備事業に係る指導者会
府内及び大友氏関係遺跡調査研究指導専門者会議(大分市教育委員会)

単著

一九九五(平成七)年
六月『日本の古代遺跡―大分―』 保育社
二〇一七(平成二九)年
十二月『大野川流域における細石器文化の研究―旧大野郡大野町小牧遺跡の調査資料を中心に―』 (自費出版)

共著

一九七五(昭和五〇)年
四月『宇佐市史上巻』『先土器(旧石器)時代』四一・五三頁 宇佐市
一九八〇(昭和五五)年
十二月『大野町史』『旧石器時代』七三・九四頁 大野町

一九八一(昭和五六)年

八月『縄文文化の研究』『縄文土器』一三五・一四七頁 雄山閣
一九八三(昭和五八)年

三月『大分県史』『先史編I』二七・四三頁、六九・九四頁、
一〇九・一一五頁、一二〇・一二五頁 大分県

一九八三(昭和五八)年
十二月『探訪先土器の遺跡』

四五八・四六四頁、四六五・四七二頁 有斐閣

一九八五(昭和六〇)年
七月『探訪縄文の遺跡 西日本』

三七〇・三七四頁、四二三・四二九頁 有斐閣

一九八六(昭和六一)年

九月『岩波講座 日本考古学 別巻二』七九・八三頁 岩波書店

一九八七(昭和六二)年

二月『大分市史上巻』三五三・三八七頁 大分市

一九八七(昭和六二)年

三月『本耶馬溪町史』四五・六八頁

一九九五(平成七)年

三月『九重町誌』三・四五頁

一九九八(平成一〇)年

十一月『長崎県のあけぼの』一〇五・一七三頁 長崎県

学術論文

- 一九六九（昭和四四）年
 一月「九州の押型文土器について」『史学論叢四』一二五・一三八頁
- 一九六九（昭和四四）年
 十月「使用痕に関する研究」『古代文化二一九・二〇』二二三・二一九頁
- 一九七〇（昭和四五）年
 十一月「押型文土器文化の礫器」『古代文化二二一・二』二四三・二四八頁
- 一九七三（昭和四八）年
 七月「九州における細石器文化―細石核の分類と編年試論―」『考古学論叢一』一一・二六頁
- 一九七五（昭和五〇）年
 四月「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢三』三一・六九頁
- 一九七八（昭和五三）年
 二月「縦長剥片―西北九州における縄文時代の石器研究一」『史学論叢九』七五・九三頁
- 一九七九（昭和五四）年
 四月「九州地方の細石器文化」『駿台史学四七』一三三・一五一頁
- 一九七九（昭和五四）年
 十月「東九州における細石核―船野型細石核―」『考古学ジャーナル一六七』六一・六三頁
- 一九八〇（昭和五五）年
 二月「大野川上流域における旧石器時代の遺跡―上岩戸遺跡―」『別府大学博物館研究報告七』一五・二〇頁
- 一九八一（昭和五六）年
 二月「大分県聖岳洞穴出土の石器」『別府大学博物館研究報告五』一五・二〇頁
- 一九八一（昭和五六）年
 三月「縦長剥片の折断技術とサイドブレイド―西北九州における縄文時代の石器研究四―」『史学論叢一二』一・二二頁
- 一九八三（昭和五八）年
 十月「九州における火山灰層序と旧石器時代石器群」『第四紀研究二二―三』一六六・一七三頁
- 一九八四（昭和五九）年
 二月「日本細石器文化の地域性」『駿台史学六〇』五七・七〇頁
- 一九八四（昭和五九）年
 六月「縄文晩期の石器―西北九州における縄文時代の石器研究六―」『史学論叢一五』一〇三・一四〇頁

- 一九八五(昭和六〇)年
五月「九州における先石器時代石器群の編年と地域性」
『日本原史』一三九・一六〇頁
- 一九八五(昭和六〇)年
七月「九州における細石器文化に伴遺物」『肥後考古五』
一九八六(昭和六一)年
一月「九州におけるナイフ形石器文化の地域性」
『別府大学紀要二七』五一・五九頁
- 一九八七(昭和六二)年
十一月「縄文時代晩期および弥生時代の剥片石器」
『東アジアの考古と歴史』一八二・二〇三頁
- 一九八八(昭和六三)年
三月「大分県駒方古屋遺跡における石器群分布の構造」
『永井昌文教授退官記念論文集』二五一・二七四頁
- 一九八八(昭和六三)年
五月「九州における縄文農耕の現状」『史学論叢一八』二二・
三六頁
- 一九八九(平成元)年
三月「シベリアの考古学調査」『史学論叢一九』七三・九八頁
一九八九(平成元)年
十一月「旧石器時代の東アジアと日本―シベリアから日本列
島―」
『季刊考古学二九』四四・四七頁
- 一九八九(平成元)年
十一月「船野型細石核のバリエイション」『おおいた考古二』
一・一〇頁
- 一九九〇(平成二)年
六月「AT(始良Tn火山灰)上位のナイフ形石器文化」
『史学論叢二一』三五・五二頁
- 一九九〇(平成二)年
十一月「船野技法についての一考察」『九州上代文化論集』二二
・三二頁
- 一九九二(平成四)年
二月「西南日本の細石器文化(英文)」『史学論叢二二』一・
一八頁
- 一九九三(平成五)年
三月「駒方津室迫遺跡におけるスクレイパーの遺存」
『別府大学博物館研究報告一四』一・一六頁
- 一九九三(平成五)年
三月「駒方津室迫遺跡の構造論的研究―遺跡の復元―剥片剥
離・石器製作技術の考察と遺跡の復元」
『別府大学博物館研究報告一四』一一九・一二八頁
- 一九九四(平成六)年
二月「石器研究のための基礎的理解」
『別府大学博物館研究報告一五』一・一〇頁

- 一九九四（平成六）年
- 三月「先史時代における東九州と南西四国との交流」
『史学論叢二四』一・二二頁
- 一九九四（平成六）年
- 三月「石器と人類の出会い―人類史における石器の位置―」
『史学論叢二四』三二・三三頁
- 一九九四（平成六）年
- 六月「姫島産黒曜石をめぐる―縄文時代の石器製法と交流―」
『Museum Kyushu 四七』五・九頁
- 一九九五（平成七）年
- 十二月「宮崎県富沢遺跡に観る旧石器化の復元」
『別府大学博物館研究報告一八』一・八頁
- 一九九六（平成八）年
- 三月「姫島産黒曜石の石器とその構造」『史学論叢二七』一・二〇頁
- 一九九七（平成九）年
- 二月「九州における後期旧石器時代の起源と前期の石器群」
『別府大学博物館研究報告一九』二七・三八頁
- 一九九七（平成九）年
- 十二月「筑後川上流域における旧石器文化（一）」『比田考古六』一・七頁
- 一九九八（平成一〇）年
- 三月「縄文時代における剥片石器生産とその構造」
- 一九九九（平成一一）年
- 『網干善教先生古希記念考古学論集』七七・九八頁
- 「南九州の旧石器文化―鹿児島県におけるAT下位石器群の最近の調査―」
『鹿児島考古三三』五九・七三頁
- 二〇〇一（平成一三）年
- 二月「九州における中期旧石器時代の石器群」『季刊考古学七四』六〇・六四頁
- 二〇〇二（平成一四）年
- 三月「九州地域における黒曜石研究の展望」『黒曜石文化研究一』八三・九四頁
- 二〇〇四（平成一六）年
- 三月「原産地遺跡の石器生産・流通と専門的集団―九州島における先史時代の腰岳産黒曜石の利用―」『黒曜石文化研究三』三一・一九頁
- 二〇〇六（平成一八）年
- 三月「石器石材としての黒曜石の利用―腰岳系黒曜石・姫島産黒曜石の生産と流通―」『黒曜石文化研究四』一七三・一八二頁
- 二〇〇九（平成二一）年
- 二月「九州島の細石刃石器群における西北九州産黒曜石の流通」
『駿台史学一三五』九一・一一六頁

二〇〇九(平成二二)年

九月「鹿児島市戸堀遺跡における西北九州産黒曜石の流通と細

石刃石器群の形成」『南九州縄文通信二〇』一・一四頁

二〇一三(平成二五)年

三月「西南日本における船野系細石刃石器群の形成と展開」

『明治大学博物館研究報告一八』一・二二頁

二〇一四(平成二六)年

八月「先史時代における腰岳産黒曜石の利用」

『月刊考古学ジャーナル六五九』二六・三〇頁

二〇一四(平成二六)年

九月「九州島における後期旧石器時代後半の定住化のプロセ

ス―九州旧石器時代研究の展望―」『九州旧石器一八』

九州旧石器文化研究会

二〇一五(平成二七)年

五月「西北九州における細石刃石器群の構造変動」『高野晋司

追悼論文集』

二〇一六(平成二八)年

十二月「九州島における後期旧石器時代終末期の石器群―端部

整形小型剥片石器群と細石器文化―」

『広島大学大学院文学研究科考古学研究室五十周年記念

論文集・文集』

科研費報告書(研究代表者)

一九八五(昭和六〇)年三月 研究期間…一九八四年度

『大分県大野川中流域における旧石器時代の研究』

科学研究費助成金 一般研究 (C)

一九八八(昭和六三)年三月 研究期間…一九八六年度―一九八七年度

『大分県大野川流域における旧石器時代の研究』

科学研究費助成金 一般研究 (C)

一九九八(平成一〇)年三月 研究期間…一九九五年度―一九九七年度

『先史時代における姫島産黒曜石の産地と流通に関する研究―

石器製作と公益―』

科学研究費助成金 基盤研究 (C)

科研費報告書(研究分担者)

一九九二(平成四)年三月 研究期間…一九八九年度―一九九二年度

『日本とシベリアの先史文化交流に関する日ソ共同調査』

科学研究費助成金 国際学術研究 研究代表者 加藤晋平

二〇一〇(平成二二)年三月 研究期間…二〇〇五年度―二〇〇九年度

『西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係』

科学研究費助成金 特定領域研究 研究代表者 佐藤宏之

発掘調査報告書

一九六七(昭和四二)年三月

三月「野間古墳群・横尾・小池原貝塚緊急発掘調査―横尾・

小池原貝塚―」

- 『大分県文化財調査報告書一三』二二一・五四頁（橘昌信・賀川光夫共同執筆）
- 一九六七（昭和四二）年
九月「深堀遺跡」長崎大学『人類学考古学研究報告一』四九・七四頁
- 一九七〇（昭和四五）年
「宝満川流域の先土器時代」
『福岡県南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第一集
一九七〇（昭和四五）年
八月「稲荷山遺跡緊急発掘調査」『大分県文化財調査報告書第二〇・二一輯』
- 一九七二（昭和四七）年
三月「山鹿貝塚 山鹿貝塚の石器」山鹿貝塚調査団
二五・四五頁、一〇二・一〇八頁
- 一九七三（昭和四八）年
三月「埴山遺跡」『福岡県文化財調査報告書五一』一・三四頁
- 一九七四（昭和四九）年
三月「コウゴ一松遺跡調査報告」大分県直入郡久住町教育委員会
一・二五頁
- 一九七七（昭和五二）年
二月「柏田遺跡の調査―西北九州における黒曜石製の縦長剥片についての考察―」『山陽新幹線埋蔵文化財調査報告四』
一四三・一七九頁、二二二・二四一頁
- 一九七八（昭和五三）年
三月「大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査一」
『別府大学博物館研究報告二』一五・二二頁
- 一九七九（昭和五四）年
二月「大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査二」
『別府大学博物館研究報告三』一三・二〇頁
- 一九八〇（昭和五五）年
二月「大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査三」
『別府大学博物館研究報告四』一七・二二頁
- 一九八〇（昭和五五）年
二月「大分県二日市洞穴発掘調査報告書」別府大学附属博物館
一・九七頁
- 一九八一（昭和五六）年
三月「大分県上下田遺跡発掘調査報告書」別府大学附属博物館
一・四三頁
- 一九八三（昭和五八）年
二月「大野川上流域における旧石器時代の遺跡―上岩戸遺跡―」
『別府大学博物館研究報告七』一五・二〇頁
- 一九八三（昭和五八）年
三月「大分県上下田遺跡 第二次発掘調査」別府大学附属博物館
- 一九八五（昭和六〇）年
二月「駒方古屋遺跡発掘調査報告書」別府大学附属博物館
一・四六頁

- 一九八六(昭和六一)年
三月「五島大板部洞窟の調査」
大板部洞窟調査団 三・二六頁、三六・三九頁
- 一九八七(昭和六二)年
二月「駒方古屋遺跡第二次・三次発掘調査報告書」
別府大学附属博物館 一・七七頁
- 一九八八(昭和六三)年
十二月「宮地前遺跡」別府大学附属博物館
一九八九(平成元)年
二月「安国寺遺跡総括―安国寺遺跡と自然環境―」
『大分県国東町文化財報告四』一一八・一二四頁
- 一九九〇(平成二)年
二月「松山遺跡」別府大学附属博物館
一九九一(平成三)年
三月「松山遺跡第二次調査報告」別府大学附属博物館 一・
一四八頁
- 一九九一(平成三)年
九月「池の岡遺跡試掘調査報告書」津島町教育委員会 一・
四七頁
- 一九九二(平成四)年
三月「大分県松山遺跡第二次発掘調査」
『日本とシベリア先史文化交流に関する日ソ共同調査
国際学術研究成果報告書』六八・八二頁
- 一九九五(平成七)年
「牟礼越遺跡―大野郡三重町所在の旧石器・縄文時代遺跡―」
別府大学附属博物館
一九九九(平成一一)年
三月「牟礼越遺跡―三重地区遺跡群発掘報告書―」
『三重町文化財調査報告書第五集』一・二〇頁

追悼文

橘昌信先生の思い出

大分県考古学会会長
 (史学科五期生 一九七一年卒) 清水宗昭

一昨年、橘昌信先生が亡くなられた。私にとって、賀川先生と共に考古学の恩人である。傘寿を前にしてご逝去されたことは残念でならない。ここに、先生の思い出を偲び、ご冥福をお祈りしたい。

出会い

橘先生と最初に出会ったのは、確か一九六三(昭和三八)年三月の長崎県北松浦郡吉井町(現佐世保市)の福井洞穴の第二次発掘調査のおりであったと思う。私は当時工業系の高校を卒業したばかりで、四月からの長崎市内での就職も内定していた。一週間近く休みがあったので、矢も楯もなく飛び込みで発掘に参加した。

発掘調査の責任者は、芹沢長介(明治大学)、鎌木義昌(倉敷考古館)の両先生であった。直接お二人の先生に発掘参加をお願いしたところ、通いなら良いということで受け入れていただいた。一週間程、佐世保市内の叔母の家から毎日通った。この調査には、岩宿遺跡の発見

者相沢忠洋氏や古人骨研究の内藤芳篤長崎大学医学部助教授(当時)も参加されており、私にとっても貴重な体験であった。橘先生は途中から参加され、初めての対面であった。先生は当時明治大学に在籍されており、芹沢長介先生が最も信頼されていたようであった。その後、先生は芹沢先生のご推挙で別府大学に着任された。これは、賀川先生と芹沢先生が八幡一郎門下のご友人であった関係が御縁とお聞きしている。

私はその後、橘先生に長崎市深堀遺跡と五島福江島の宮下貝塚でお世話になった。両調査とも別府大学と長崎大学との共同調査であり、賀川光夫先生と内藤芳篤先生が責任者であった。私は会社の有給休暇をまとめてとり、特別に参加させてもらった。そのきっかけは、福井洞穴で面識を得た内藤先生のお導きのお陰である。深堀遺跡の発掘では、夜のミーティングがあり、賀川先生の土器の話、内藤先生の人骨の話があった。その中で、橘先生は石器の見方、図の取り方等を手ほどきしてくださった。そのことが縁となり、私も特に石器に興味があったことから、長崎大学医学部で石器の遺物整理について、橘先生のお手伝いをするようになった。洗浄の後、実測も大半は私が担当することになった。週三日、退社後夜九時過ぎまで、その後宮下貝塚の石器の整理も行った。橘先生には、時々別府から来てもらい、指導を受け、何とか責を果たすことができた。このことが後年私が石器をライフワークとすることにつながったと思っている。この時、橘先生から石器の基礎的なものを学んだのである。

大学でのこと

私が四年後会社を退職し、別府大学への進学を決めたのも、深堀遺跡での賀川光夫先生、橘昌信先生が教鞭をとられていたからである。先のことはあまり考えず、無謀とも思える進学であったが、考古学の魅力はどうしようもなく長崎の地を離れた。結果的によいものであったが、これも両先生の学恩の賜物と感謝している。

大学では、すでに史学科の一期生が卒業しており、同期に、小倉正五、横山邦継、高木正文、丸山武水、塚原博君等が居た。ともに一年時から研究室活動に参加させてもらった。ただ、しばらくすると全国の大争紛争が別府大学にも及んで来た。私も小倉君達と自治会活動に加わるようになり、大学の講義も度々中断されることが多かった。そうした中であったが、大学の発掘調査には、できるだけ参加するようにした。橘先生とご一緒したのは、大分市御陵古墳、竹田市荻町桜町遺跡、宮崎県岩土原遺跡等を思い出す。特に大分市御陵古墳は、賀川先生が療養中の事であり、後に消滅することになった県内屈指の前方後円墳の保存問題で、先生が人知れずご苦労されていたことを思い出す。また、同期の横山君が宮崎の実家でケガをして入院した時、先生の運転する車で、小倉正五、塚原博の両君と見舞いに行った。先生はそうした優しい心遣いをされていた。

卒業論文の際は、東京の明治大学での資料採訪の時、先生も同行していただきお世話になったことが忘れられない。旧石器関係や夏島貝塚の資料等を先生のお陰で存分に見ることができたことは幸いであった。それに対して、学生時代に私が先生のお手伝いしたことといえば、

長崎県史の旧石器の作図のことしか思い出せない。

九州でのお仕事

橘先生は、学外においても多くの業績を残されている。九州旧石器文化研究会の会長を当初から長く勤められ、九州の旧石器時代について体系的研究を常にリードして来られた。これは、先生が学生時代から北海道をはじめ、全国の遺跡、遺物に通曉されておられ、高い見識の持主であったことによる。特に、先生は細石器文化研究の第一人者であったと云ってよい。宮崎県船野遺跡の調査成果をもとに船野型の細石器を定義され、文化圏を設定された。また、今日角錐状石器とされることが多い断面三角形の石器を「三稜尖頭器」と命名された。それは石器の本質に迫る卓見といえよう。私自身、その先生の影響を受け、剥片素材の尖頭器に剥片尖頭器という名称付ける大きな契機となった。一方、橘先生は縄文時代の押型文土器、縄文各期の石器の研究においても他の追随を許さないものがあつた。

国際的交流研究

橘先生はさらに、東アジアの旧石器文化研究の中でも重要な存在であった。一例をとれば、二〇〇八(平成二〇)年宮崎県西都市で行われた、第十三回スヤンゲ国際シンポジウム九州大会の日本側の中心者として会を成功に導かれた。この会には、私にも声をかけていただき、初めて参加した。これ機に私は韓国、中国での同シンポジウムに度々参加できることになった。そして、スヤンゲ国際シンポジウムの主催者忠

北博物館長の李隆助博士をはじめ、韓国や諸外国の旧石器研究者と交流することができ、大きな財産となっている。そのことから私にとつて橘先生の学恩は大変大きいと感謝している。

ともあれ、橘先生は別府大学においては、半世紀近くにわたり有為な学生を数多く育てられ、社会に送られてこられた。その教え子の多くは西日本各地の文化財行政等で活躍し、すでに退職している方も多い。また旧石器研究の面においても不滅の足跡を残されている。それは九州にとどまらず、東アジア地域にも及んでいる。橘昌信先生は、大学人として、先史考古学者として、後進の私達に偉大な財産を残して逝かれた。私もまた微力ながらその大切な遺産を後に続く人に伝えていかなければならないと想いを深くしているところである。

橘先生、安らかにお休みください。

(二〇二二年一月二一日)



2008年 第13回スヤング国際シンポジウム九州で発表される橘先生 (清水先生提供)



2008年 第13回スヤング国際シンポジウム九州(宮崎)にて(橘先生は前列左から2番目)
(清水先生提供)

追悼文

橘先生の優しさ

別府大学文学部客員教授 平尾良光

私が橘先生とお目にかかるようになりましたのは、私が別府大学へ
伺うようになった約二十年ほど前からでした。そして、約十年別府大
学の文学部文化財学科で一緒に過ごしていただきましたが、先生は考古
学分野、私は文化財科学分野の研究をしておりましたので、接点が
少なくお互い定年を迎えました。先生よりも一、二年後でしたが、私
も学校の公式業務から離れました。それでも大学院教育のために、先
生も私も非常勤講師として学校に残っておりましたので、学校側は橘
先生と私に一つの研究室を用意してくれました。つまり二人で一つの
研究室を偶然共有させていただきました。

部屋の真ん中に本立てを並べて仕切り、それぞれの机を用意しまし
た。小さな机を部屋隅に置き、お茶や昼食の場としましたので、実質
的に先生とお話しするようになったのはこの時からです。

それから約三年一緒に過ごしていただきましたが、一緒に部屋におり
ましても先生との接触はほとんどありませんでした。なにせ先生は考
古学の石器の世界、私は文化財科学の金属の話と専門が全く違うので、

研究方法、場所、材料などで話が合わなかったのです。先生は朝九時
に研究室に現れ、お昼まではほとんどお話しすることもなく、コン
ピュータに向かって居られました。昼食時に片言お話しするのですが、
先生も私も話をそれほどうまく繋げないために、会話も途切れがちで
した。そして午後はまた机に向かうという日課でした。

ある時、先生の趣味の一つが「釣り」であるとい、連れて行って
もらうことにしました。私も釣りをしたことはあるのですが、ここ
四十年ほど出かけたことはなかったのです。先生は控えめに、どうし
たら良いかを訥々(とつとつ)とお話しくださるので、そのご指示に従っ
て準備した覚えがあります。

初めて連れて行っていただいたのは大分市の陸から離れた堤防でし
た。先生の御指示で竿を出していましたが、先生はいつのまにか黒鯛
を二匹釣り上げておられました。しばらくして私にも黒鯛が一匹釣れ
ましたが、この時、同じ堤防にいた他の釣り人には全く釣果がなく、
橘先生にどんな仕掛けか、どの位の深さを聞いていた覚えがありま
す。先生は丁寧な質問に答えられておられました。この雰囲気から
橘先生は釣りをよくご存知なのだと思いましたが、その後何度か別府
や大分の堤防に出かけましたが、先生は釣れても釣れなくても気にせ
ず、釣りという雰囲気を楽しんでおられるようでした。そして先生の控
えめな態度には変わりなく、常に、「他の釣り人の邪魔にならないよう
に。釣り場を汚したら洗って帰る。針や糸を海へ捨ててはいけない。」
など、ご自分に言い聞かせるようにお話しくださったことが思い出さ
れます。

それから先生は釣った黒鯛を持ち帰らないで放すとおっしゃるので、釣った後は食べるという考え方しかなかった私にはびっくり話でした。またある時、堤防の近くを泳いでいた大きな「コブ鯛（寒鯛）」を見つけました。しかもそれを釣ろうとしている人がいました。次回二〜三週間後に出かけた時にはもうそのコブ鯛は見当たりませんでした。先生は独り言のように、「コブ鯛は何も悪いことをしていない。それよりも私たちを楽しませてくれている」と、コブ鯛を慈しんで



2013年5月 別府大学33号館でのバーベキューにて（橘先生は左側）
（佐藤さくらさん提供）

おられました。コブ鯛が居場所を変えたのか、釣られてしまったのかは判りません。

最晩年、先生を釣りに行きませんかとお誘いしても、ご遠慮なさって居られたのは、先生のご体調が思わしくないのでなく、私に迷惑がかかることを心配してくださった先生の優しさだったかと思うと、今でも懐かしさを禁じ得ません。

ご冥福をお祈りいたします。



2016年2月 別府大学33号館での院生発表会にて（橘先生は右側）
（佐藤さくらさん提供）

追悼文

橘昌信先生との思い出

―エーゲ海沿岸の古代都市紀行―

別府大学文学部名誉教授 山本晴樹

橘先生との思い出ですぐさま頭に浮かぶのは、先生と一緒したエー

ゲ海沿岸の古代都市紀行です。今からもう四十年ほど前のことですが、一九八二（昭和五七）年八月二日から一六日まで、別府大学第三次海外学術研究団（团长西村駿一先生外五名）の一員として橘先生と私は史学科からエーゲ海沿岸の古代遺跡視察のため派遣されました。当時はまだソヴィエト連邦の時代で、ロシア上空を経てヨーロッパへ行く便は開設されておらず、はるばる南周り（東南アジア→中東→ヨーロッパ）のコースでした。従って行き帰りの途中で一泊しなければなりませんでした。確か飛行機はパキスタン航空だったと思います。

やっこの思いでギリシアのアテネ空港にたどり着きました。それからギリシア古代都市のアテネ、ミューケーネ、コリント、エピダウロスなどの遺跡を視察しました。考古学を専門にする橘先生や西洋古代史を専門にする私にとってまさに「古代への情熱」をかき立てる遺跡ばかりで感激したものです。

ギリシアの古代遺跡を視察したあと、次にトルコへ入りました。深夜、ギリシアとトルコの国境を越えましたが、陸地伝いでの国境越えは初めての経験でした。当時の両国の関係を反映してか入国管理は驚くほど厳しいものでした。翌朝トルコの国境の街並みを見たとき、「初めてだけどなつかしい」というなにより旅行会社の宣伝文句のような感覚をもちました。紀行エッセイ『雨天炎天』（新潮文庫）を書いた村上春樹さんや、同じく紀行エッセイ『深夜特急』（新潮文庫）の沢木耕太郎さんは、逆にトルコからギリシアへはいりますが、そのとき二人とも「何かが失われた」という感想をもらしています。同じ感覚の裏表のような気がします。

トルコの古代遺跡は見ごたえのあるものでした。イスタンブールから対岸の小アジア半島側へ渡り、エーゲ海岸沿いにトロイア（トロイ）、ペルガモン、スミルナ（イズミール）、エフェソス、プリエネ、ミレトス、デイディマといったどれをとっても一級品の古代遺跡を視察することができました。これらの遺跡は現在では比較的によく知られるようになりましたが、当時はそれほどではなく、それだけに現地をみたときには興奮しました。そのなかで、橘先生との思い出で印象深いのがエフェソス遺跡です。

エフェソスは古代ローマ都市として有名で、当時の遺跡がいたるところに残されています。とりわけ劇場の遺跡は見事で、ここにはあのアントニウスとクレオパトラも訪れています。また聖書では「エペソ」として描かれているように、キリスト教ゆかりの都市で聖地となっています。

われわれ一行がこのエフェソス遺跡を訪ねたとき、劇場近くでちょうど発掘調査が行なわれていました。ここは長年ウィーン大学の考古学チームが発掘を担当しており、掘り下げた遺構の図面取りをしていました。考古学者の橘先生はさっそく興味をもち、わたしも直接現場をみてみたかったですから、迷惑を顧みず見せてもらうことにしました。ウィーン大学の学生と思われる二人は突然の要請にもかかわらず心良く見せてくれました。今考えると随分ぶしつけな行為だったと思います。しかし橘先生と私にとってはエフェソス遺跡の発掘現場に立ち会えたことで、大変忘れがたい思い出になりました。そのあと橘先生と二人して、発掘現場で出会ったウィーン大学の女子学生がまるでギリシア彫刻の女神のように美しかったと話し合ったことでした。



1982年8月 ウィーン大学トルコ・エフェソス遺跡発掘現場見学にて（橘先生は右端）（山本先生提供）

追悼文

恩師橘昌信先生に教えを受けた四年間

史学科八期生(一九七四年卒) 坂本嘉弘

一九七〇(昭和四五)年四月、考古学の勉強をしようと私は、別府大学文学部史学科に入学した。しかし、それまで土器も石器も全く触ったこともなく、何をどうしていいのか、全くわからず、無為に時間ばかりが過ぎていた。そこで、夏休み明けの九月、同級生の牧尾義則君と校門を入った右手奥の林の中に建つ「別府大学考古学研究室」の看板の掛った二階建ての建物を訪ね、考古学の勉強をしたいと相談した。

その頃の考古学研究室は、福岡県で発掘した弥生時代の甕棺墓の整理作業をしており、さっそく、上級生の指示を受けながら復元作業にあたった。と同時に、試験休暇の十月上旬に計画されていた宮崎県船野遺跡の発掘調査に向けての準備期間で、橘先生の指導で上級生が旧石器時代の論文を解説する事前の勉強会も行われていた。何も知らない私は、それにも出席し、考古学の世界に浸った。

幸運にも橘先生の研究対象である船野遺跡の発掘調査に参加させてもらい、これが私にとって初めての考古学の現場体験となった。宮崎県佐土原町船野の公民館で合宿・自炊し、昼間は発掘作業、夕食後は

ミーティングや宮崎大学の地質学の先生による火山灰の講義など充実した時間であった。先生は、考古学初心者である一年生の私に、優しく丁寧に、そして現場では自ら考え動くことを教えていただいた。また、先生は気さくで、学問以外でも分け隔て無く話しかけてくれ、楽しく充実した一週間であった。この先生のご指導で実施された発掘調査が私の人生を決定づけたと言える。

この頃の九州は九州縦貫自動車道・山陽新幹線・団地造成・圃場整備事業などの開発事業が目白押しであるにもかかわらず、対応する行政も体制が不十分で大学に調査依頼が相次いでいた。このため、別府大学は学術調査に加え、開発事業に伴う発掘調査も行っていた。

大学の発掘調査は、若い橘先生が指導教官として学生を引率し実施する体制で行われていた。船野遺跡以後、十一月に宇佐市四日市遺跡、十二月に国東町成仏岩陰遺跡、二年生の夏休みには船野遺跡二次調査、長崎県脇岬貝塚、宇佐市立石貝塚、十月に竹田市萩町横迫遺跡、十二月福岡市倉瀬戸古墳群、春休みに船野遺跡三次調査。三年生の夏休みに対馬志多留貝塚、福岡市蒲田遺跡、福岡県城山遺跡、竹田市萩町野鹿洞穴、十月に福岡県峠山遺跡、冬休みに再び蒲田遺跡、そして春休みに新幹線操車場の福岡県深原遺跡。四年生の夏休みの福岡市蒲田遺跡と実施され、全ての調査に同行させていただいた。今でも当時のことは鮮明に覚えている。

また、発掘以外でも対馬志多留貝塚の事前調査、北九州の自衛隊声屋基地内の分布調査、行橋市の古墳の分布調査、四年生の夏には、沖ノ島の報告書作成のため、広島大学・岡山大学・倉敷考古館への資料

調査にも連れて行っていただいた。このように先生の後ろ姿を追いかけ、教えるを受ける学生生活であった。

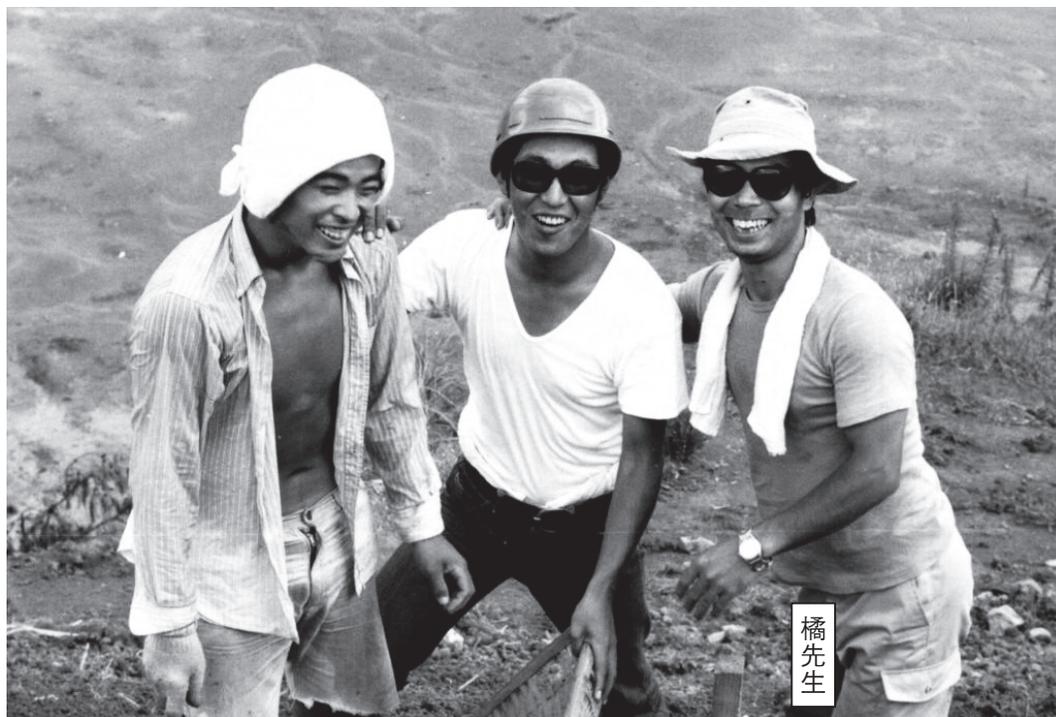
振り返って見ると、この四年間に、橘先生が手取り足取り指導・指示していただき、社会に送り出してもらったおかげで、考古学と関わる私の人生の今日があると言える。それなのに、卒業以来、不義理を重ねて来てしまい、大変申し訳ない思いが込み上げてくる。数年前、安齋正人先生が来県した際に私の車に乗っていただき、県内の遺跡や資料館を案内した。「学生時代に先生の運転する車に度々乗せてもらった恩返しです」と言ったら、笑っておられた。その日は別府の自宅近くまでお送りし、何か私でお役に立つことがありましたら、是非ご連絡をして下さいと話し、お見送りしたのがお会いした最後となってしまった。

先生の訃報を聞いたのは、葬儀も終わったあとだった。今これを書きながら思い出すのは、お世話になってばかりで、迷惑ばかりかけた学生時代の日々である。どうか不義理な弟子をお許し下さい。

橘昌信先生、本当にありがとうございました。



1972年夏 対馬志多留貝塚にて（橘先生は最前列左から2番目）（坂本さん提供）



1973年夏 福岡市蒲田遺跡にて（橋先生は右端）（坂本さん提供）



1976年 九重町二日市洞穴にて（橋先生は前列右から2番目）（坂本さん提供）

追悼文

橘先生との思い出

史学科十六期生（一九八二年卒） 栗 焼 憲 児

一九七八（昭和五三）年に別府大学に入学しましたが、先輩の紹介で橘先生の研究室に出入りするようになり、ここから私の文化財人生が始まることになりました。当時は考古学を勉強したいとの思いから大学を目指し、学問の世界に足を踏み入れたことに緊張しながらその反面、本格的に考古学というものに触れることができる喜びに大きな期待を抱いていたと思います。

そして、初めて橘先生にお逢いしたのは既に廃止されている大学の付属博物館の研究室でした。外壁が白く塗られた四階建ての建物で、学生の間では「白亜の殿堂」などと呼ばれていました。

先生の研究室は博物館の一階で、当時は白井先生という事務長の方もいらっしやいました。因に賀川先生は四階の館長室に、三階には後藤重己先生がいらっしやいました。その頃、研究室では本耶馬溪町（現中津市）の粉洞穴と九重町の二日市洞穴の調査を行っており、私は二日市洞穴の調査に参加させていただくことになりました。当時は全国的に洞穴遺跡の調査が進められており、別府大学でも既に成仏岩陰遺

跡や河原田洞穴遺跡の調査などを行っていました。

二日市洞穴は一九七五（昭和五〇）年にその存在が確認され、九重町の要請を受け別府大学考古学研究室が学術調査を実施することになり、五次にわたる調査で縄文時代草創期から後期に至る遺跡の実態に迫ることが出来ました。

この間、私が携わったのは第五次の調査から報告書の作成までで、大学の講義が終了したのちに足繁く研究室に通い、資料の整理の基礎から御指導をいただきました。特に初めての洞窟遺跡の調査は何もかもが新鮮な体験で、オープンサイトとは違う限られた空間での調査はとても貴重な体験となりました。また、報告書の作成に伴う資料の整理作業では石器の実測を指導していただき、その後私が旧石器時代の遺跡に興味を持つきっかけとなりました。

また、橘先生の研究室では「大野川流域における先史時代の調査研究」と題して大野川中流域の旧石器時代遺跡の研究をテーマにしていますが、私が関わったのは清川村（現豊後大野市）に所在した上下田遺跡の調査で一九八〇（昭和五五）年に第一次調査、翌年に第二次調査が別府大学付属博物館の事業として実施されました。遺跡は細石器段階の良好なもので無斑晶流紋岩という特徴的な石材を用いた細石核は、九州を代表する資料といっても過言ではありませんでした。

最後に、今でも記憶に残っているのは大学の卒業式の夜のことです。ご存じの通り先生はお酒が得意ではなく、大学のコンパなどでは苦労をされていましたが、我々の卒業式の夜、大学通りの馴染みの店にみんなで集まった時、お誘いすると二つ返事で来ていただき、実に楽し

そうにお相手をしていただきました。酒の席で先生のあんな笑顔を見したのは初めて最後だった気がします。

昨年、先生の訃報をお聞きし、まだまだお元気と思っていただけに俄には信じられませんでしたが、ご冥福をお祈りし、先生との思い出とともに姿を消したあの「白亜の殿堂」と呼ばれた別府大学付属博物館に思いを馳せながら、その御恩に感謝したいと思います。

合唱



1978年夏 二日市洞穴にて（橘先生は前列左端）（栗焼さん提供）

追悼文

「豊後水道」

史学科二四期生（一九九〇年卒） 多田 仁

二〇一八（平成三〇）年十月二十日の午後、別府への帰途に向かう橘昌信先生を愛媛県八幡浜港へお送りした。先生は私の肩に軽く手をおいて、「ありがとう」と少しうつぶきながら語りかけてくれたことを思い出す。この時が先生とのお別れであった。これより以前に、先生が病に悩まされていたこと、ご自身が治療に際して健康寿命を選択されたことを打ち明けられていた。この選択に至る本当の理由を知る由もないが、先生は最後まで明るく生きることを選んだのだ。

私は三五年前の一九八六（昭和六一）年、大学一回生の頃から先生の研究室へ通うことになった。日常は報告書作成に関わる先輩方のお手伝いであったが、同時に石器実測や記載方法なども学ばせていただいた。さらに、休みの時期には先生の主導による発掘調査に参加させていただき、調査方法やその記録手法などを体得する日々も重なった。

どんな時にも、どのような立場の人へも、ユーモアを交えながら明るく接した先生のお人柄は、我々教え子たちに大きな影響を与えたと信じている。もちろん、私もそんな先生に魅了され、考古学の楽しさ

や厳しい実践を正面から受け止めることができた。大学の卒業後に迷いなく考古学を生業とした道を選んだのは、先生と出会った楽しい学生生活と、その時に培った先輩たちとの結びつきが動機であった。

私が勤め人になってからも先生との繋がりは途切れることはなかった。業務の傍ら、旧石器時代研究に関わり続けてきたことがあったことだ。各所で行われた研究会へ参加するたびに、先生にお会いすることが重なり、卒業後も間を置かずして接する機会は多くなったのである。また、生前には私の暮らす愛媛にもよく来ていただいた。私が担当していた発掘調査において、その指導をいただくためにお招きしたことが多々あった。さらに、遺跡や遺物の見学のため、あるいは四国の研究者へ会うために足を運んでいたことも数えきれない。おそらく十数回以上は愛媛まで足を運んでいたはずだ。そのたびに別府と四国を結ぶフェリー乗場への送迎が繰り返された。

さらに、先生は退官が近づいた頃から、若い時期に興味としていた釣りを再始動した。大分県内でも波止や磯に向向っていたようであるが、愛媛の南予地域とともに竿を出すことも多くなった。磯釣りシーズンの十一月から翌年三月の間には、ひと月に一度、愛媛まで来ていた。その度に私が港まで先生をお迎えしたものだ。朝日が周囲を照らす磯に上がって会話もなく仕掛けを作った時、早い時間の昼弁当を食した時、ターゲットとは異なる獲物を釣り上げて肩を抱き合って大笑いした時、夕暮れのフェリー乗場へ向かうまでに熱いうどんを楽しんだ時、先生と過ごした時間は、恩師と教え子という関係を越えたふれあいを満喫したひと時であった。人としての思いやりや気配りに欠けていた

私にとって、考古学以外の大きな学びを受けた気がしてならない。学問を自らのものにするために努力を惜しまないことはもちろんのこと、人間として生き抜くことも大切なことであることを、先生に接することで気づいたと思う。

しかし、先生と出会えた別府大学に、暗く悲しい出来事があった。聖嶽洞穴の調査に端を発した別府大学への中傷報道である。この時、先生は多くの複雑で耐え難い苦しみを受けていたに違いない。今思えば、あの時のお言葉がシグナルだったのではないかとさえ感じることもある。先生に温かい恩恵を受けながら、敏感に受け止められなかった自分を恥じる。多くの言い分もあっただろうが、さらけ出すことなく、投げつけられる心無い言動にも動じることなく、黙して耐え抜いたお心には言葉もない。この出来事でも、私は先生から多くのことを学んだのだ。

先生と私の交流は、九州と四国の間にある豊後水道を往来することを常としていた。先生にお会いするため、どれほどこの海を渡ったことだろう。先生と私を結びつけたのは豊後水道だったのである。愛媛に暮らす私は、この海峡を眺める度に先生との楽しい日々を思い出している。先生との出会いは、私の生涯に連動した記憶となって残った。



1994年11月 柳州シンポジウムにて(橘先生は前列左から3番目)(多田さん提供)

追悼文

我が恩師 橋 昌信先生

史学科二六期生（一九九二年卒） 鎌 田 洋 昭

一九八八（昭和六三）年四月、別府大学文学部史学科へ入学後、下宿の同級生の誘いで附属博物館の一階にある考古学研究室の扉を叩いたのが、考古学研究への道を歩み始める一歩となりました。研究室では、橋昌信先生の御指導のもと調査が行われた松山遺跡一次調査の整理作業中であり、現在までくされ縁となる石川哲哉、中野宏一、山本賢一郎の三氏との出会いもありました。当時は「大野川流域における先史時代の調査研究」の一環として、夏季・冬季休暇等に分布調査や発掘調査を継続的に実施されていた時期であり、私達は研究室の最盛期とも言える時期に学部生・研究生時代を過ごさせて頂いたと思います。

さて、私は一回生から松山遺跡をはじめ、駒方津室迫遺跡など九州の後期旧石器文化を語る上で指標となる数多くの遺跡の分布調査や発掘調査に、公民館や民宿で研究室の仲間と寝食を共にしながら参加させて頂きました。日々の調査の疲労感とともに、調査成果に一喜一憂しながら、橋先生や同窓生たちと一緒に、ひとつの遺跡に真剣に向き合う楽しさと緊張感を感じていました。

一日の調査の締めくくりのミーティングでは、橋先生は、最高学年生に進行を任せ、各トレンチの調査責任者からの報告を見守っておられました。そして、最後に最新の調査成果から推定される石器群の様相と、今後の全体的な調査方針について御指導されておられました。私達は、屋外調査を通して、橋先生から再現可能である科学的な発掘調査の実践と、出土遺物の分析方法について指導を受けることができました。

また、駒方津室迫遺跡の発掘調査の終盤、悪天候により調査が遅々として進まないことを橋先生に相談したことがありました。期間中に完了させることで頭が一杯となり、心の余裕がなくなっていた私に、橋先生は「忙中に閑ありだよ。」と優しくおしゃいました。私は、その一言で肩の力が抜け、晴天時に向けての準備やこれまでの調査成果の整理を進めることができました。

発掘調査も終わり、あるクリスマスの日、研究室で数名の学生と整理作業中、研究室の裏口から橋先生が入って来られ、私達に当時流行はじめて間もない美味しいティラミスを届けてくださったこともあり、橋先生は、いつも私達に温かな目配りと心配りをして下さっていました。

さて、私が石器研究の中でも剥片剥離技術により関心を深めることとなった遺跡が、一九九〇（平成二）年夏に調査が行われた駒方津室迫遺跡です。この遺跡の報告書は一九九二（平成四）年に刊行されましたが、さらに一年かけて、石器群の接合および同定による個別別資料を進めていました。そして、橋先生の指導のもと、研究室の学部

生らと気持ちをひとつにし、絆を深めながら取り組んだ『駒方津室迫遺跡の構造的論的研究』の刊行が決定した時には、みんなで大喜びしたことを昨日のように思い出します。「遺跡に残された情報からいかにして旧石器人の生活を復元するか」を研究課題として取り組んだ研究報告書を、今改めて本棚から手に取ると、橘先生と一緒に手作りの個別接合資料の分布図を見つめながら議論を交わした日々が思い出され、臉が熱くなります。

私は、一九九三（平成五）年四月に指宿市役所の入庁後も、水迫遺



1989年 瀬目洞窟確認調査にて（橘先生は前列左端）（鎌田さん提供）

跡での総合調査や西多羅ヶ迫遺跡の検討委員会の場で、橘先生から学生時代と変わらない親身な指導を頂く機会に恵まれました。目を閉じると、橘先生がレベルを覗くお姿や、革製のケースに入ったルーペで石器を観察するお姿が目に残ります。もう少し、橘先生とお話が出来たかったです。

末筆ながら、橘先生から頂いた多くの御指導と御恩に対し、深く感謝申し上げます。ありがとうございます。心より、橘昌信先生のご冥福をお祈り申し上げます



1989年 平尾台分布調査にて（橘先生は前列左から2番目）（鎌田さん提供）

追悼文

橋先生との思い出

史学科二八期生（一九九四年卒） 稲村 秀介

久しぶりに、職場の書棚にある『駒方津室迫遺跡・夏足原遺跡（〇地区）』（大野町教育委員会、一九九二年）を手にとってみる。橋昌信先生との、懐かしく温かい記憶の数々が、つい昨日のことであるかのように溢れてくる。

私は、一九九〇（平成二二）年に、文学部史学科に入学すると、すぐさま「考古学研究室」の門をたたいた。当時、付属博物館の一階に考古学の学生たちが集まる実習室があり、先輩たちは松山遺跡の報告書作成に明け暮れていた。橋先生が「うちは一回生にだって活躍してもらうぞ!」と声をかけて下さり、三回生の鎌田洋昭氏・石川哲哉氏・中野宏一氏・山本賢一朗氏らから遺物の見方や実測方法を丁寧に教えてもらった。それが研究室の流儀であった。一年先輩には小鹿野亮氏・今田秀樹氏・日高広人氏・高塚啓介氏らがおられ、同期には、池田朋生・黒川忠広・阿南亨・橋本幸治らがあった。

同年、本学と中国復旦大学との連携による研修に参加させて頂き、橋先生や学年主任の友永種先生のご推薦で「別府大学付属博物館だよ

り」三六号に、まだ一回生の分際で半坡遺跡博物館の視察レポートを寄稿させて頂いた。

一回生の夏には、生涯忘れられない思い出がある。大野原台地での旧石器遺跡の発掘調査である。大野町の公民館に寝泊まりし、炎天下の中、駒方津室迫遺跡の旧石器文化層を発掘した。一センチに満たない剥片類をも見落とさぬよう、私たち学生は真摯に調査に取り組んだ。私は、ナイフ形石器を掘りあてた。嬉しかった。先生にみてもらった。先生も一緒に喜んで下さった。この遺物を取り上げた日の夜、橋先生に命じられて公民館の黒板にスケッチを描いた。鎌田先輩の指導のもと頑張った。先生は「稲村は、石器を描くセンスがある」と褒めて下さった。私は旧石器研究の魅力にとりつかれた。

結果として、私の大学生活は、駒方津室迫遺跡の分析を中心としたものとなった。寝ても覚めても石器を実測し、接合し、石器群の解釈を試みた。橋先生は私に実測図のトレース・観察文にも挑戦するように勧めて下さり、私は報告書の原稿作成に没頭した。当時はワープロもたず、ひたすら二百字詰め原稿用紙と格闘した。刊行された報告書を前に感動し、安堵した。

ところが先生は、「稲村、これからが始まりだ!」とおっしゃったのだ。石器の接合は、報告書刊行後も成果が出続けた。私も頭の中に石器の各面の形状が詳細に記憶され、目を閉じても接合が進むようになってきた。起床すると研究室へ走り、橋先生と一緒に、私が夢の中でくつ付けた資料を実際に合せて確かめるといったことが何度もあった。私の現在の妻である上田由香に至っては、普通なら試みることにすら稀であ

ろう調整剥片等の接合作業にいそしんだ。日が経ち、さすがにこれ以上は難しいと思うようになった頃、石器群の六割以上が接合資料になっていた。母岩から製品へと至るいわゆる狸谷型ナイフ形石器の製作プロセスが、詳細に復元できていた。

先生のもとで私たちは全力で勉強し、遺跡内での旧石器人の生活の全体像の解明をテーマとして資料の分析を続け、分担して報告書作成に取りかかった。学部生たちが執筆した『駒方津室遺跡の構造論的研究』が、別府大学付属博物館研究報告書として刊行された。我が家の家宝である。

さて、先生のお人柄を表す思い出をひとつ記そう。それは卒業論文の提出日のことであつた。私自身は何とか論文を綴じ終え、学生課へ期限内に持ち込むことができた。しかし提出期限の時刻を迎えても提出が間に合わない者がいたのだろう。提出窓口の所に橘先生が立っておられた。学生課の職員の方が「先生、時間が過ぎていきます」と言っておられる。橘先生は、「そうかなあ、おれの時計はまだまだやけどなあ。」と、とぼけていらつしゃつた。

紙幅が尽きたので、ここまでとさせて頂こう。一方、敬愛する先生から頂いた学恩は、私の人生において尽きることはない。

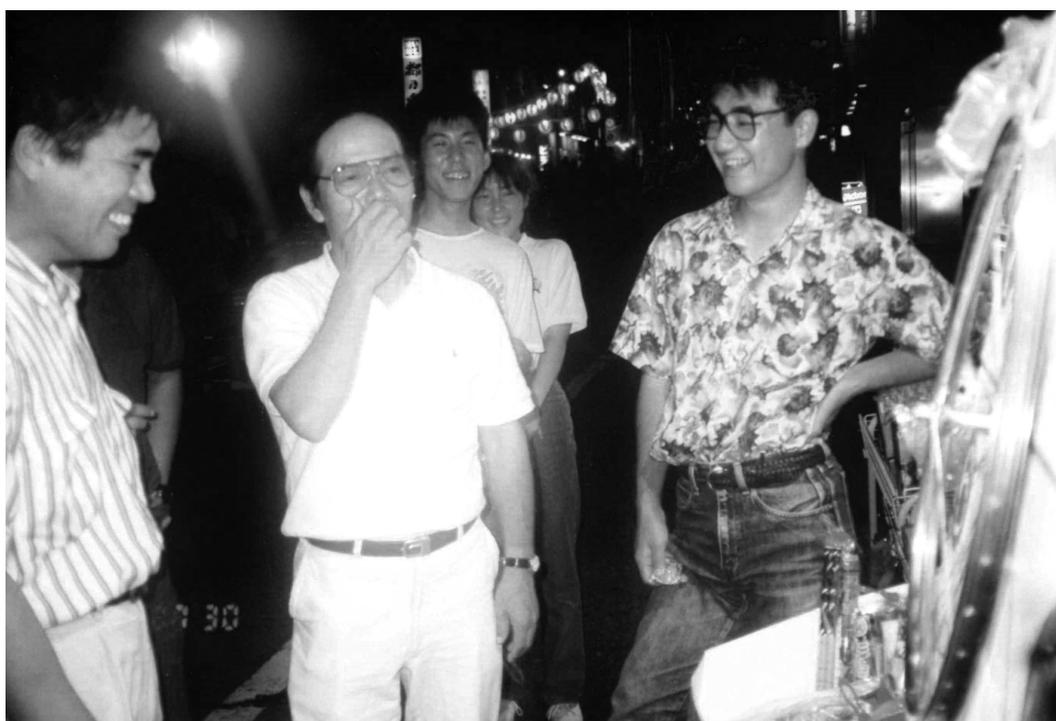
橘昌信先生のご冥福を、心よりお祈り致します。



1992年4月 遺跡調査の記念写真（橘先生は前列右から2番目）（稲村さん提供）



1993年3月 卒業式での集合写真（橘先生は前列左から2番目）（稲村さん提供）



1994年夏 九州旧石器文化研究会の思い出（橘先生は左から2番目）（稲村さん提供）

追悼文

橘先生との思い出

史学科二九期生(一九九五年卒) 金丸 武司

一九九一(平成三)年四月、新入生として初めて研究棟一階の研究室を訪れた時、壁沿いの棚に船野遺跡と書かれたト口箱を見つけました。先輩方の前で出身を訊かれ、「船野遺跡の近くです」と答えると、黒板を向いていた先生がこちらを振り返りました。この時船野地区で発掘調査が行われたことは知っていましたが、橘先生が調査されたとは知りませんでした。今思えば出過ぎた自己紹介をしたと思いますが、それがきっかけで、先生からは何かと声をかけて頂きました。

在学中は、休みの度に船野台地に向いては表面採集し、先生に見ていただきました。いつしか先生より「表採の鬼」と言う異名を頂きましたが、それは何より先生の喜ぶ顔を見たいからでした。

一回生の冬、大野川流域の石材調査に参加した時のこと。旧石器遺跡の表面採集では良好な遺物を採集できるのに、すぐ麓の川原から類似した石材がどうしても見つからない。一体旧石器人はどこで石材を採取したのだろう。夜の検討会で、先生は私達が神と怖れる先輩達と共に真剣な表情で地図を睨み、時には宙を見上げて考え込んでいま

した。研究に打ち込む姿とはこういうことなのかと、圧倒された事を思い出します。

二回生になると、駒方津室迫遺跡の室内整理作業が本格的に始まりました。出土した石器群から、遺跡に繰り返し訪れた旧石器人の動きを追う難事業への挑戦。終盤は寝る間を惜しむほど、忙しい日々が続きました。しかし作業の合間に行われた、遺跡構造論をテーマとした討論は毎回面白いものでした。ひよっとしたら今が人生で最も考古学に没頭した、充実した時間なのかもしれないと当ても脳裏をよぎりましたが、三十年を過ぎた今になって、心の底からそう思います。努力の甲斐あって、「駒方津室迫遺跡の構造論的研究」は旧石器研究史に残る話題作になりました。その報告書の末尾、先生は我々学生に「ご苦労さん有難う」と労ってくださいました。最初見た時、万感の思いがこみ上げ、文字が涙で滲んだのも懐かしい思い出です。

先生は卒業論文も担当してくださり、様々な指導を頂きました。卒業後、宮崎県の田野町役場に就職してからは、旧石器時代や縄文時代の学会で度々お目にかかりました。挨拶すると屈託のない笑顔で応じて下さいました。特に記憶に残るのが平成一三年度、本野原遺跡の発掘現場にいられた時のことです。ご指導を賜ったばかりでなく、後日私の体調を気遣うお手紙を頂きました。あの時は、実際精神的にも体力的にもギリギリの状態で現場に臨んでいたのも、ご厚意が心に沁み、目頭が熱くなった事を思い出します。

橘先生は、大野川流域の旧石器時代の研究を精力的に取り組まれましたが、調査成果に対しては慎重さを貫きました。一足飛びの仮説や

安易な断定とは無縁。それが先生の考古学への向き合い方でした。すっかり執筆から遠のいた私ですが、研究の礎として地道な作業を重んじられた師の姿をいつかは追いたいと思います。それが、先生のご恩に報いる事ができる、たった一つの方法と思うからです。末尾ではありますが、先生、本当に有難うございました。そして、心よりご冥福をお祈り申し上げます。



2010年3月 懇親会にて(左側が橘先生、右側は平尾先生)(佐藤さくらさん提供)



2011年6月 学内にて(左側が橘先生、右側は後藤宗俊先生)(佐藤さくらさん提供)

追悼文

橘先生と周口店遺跡で石器調査

史学科三十期生(一九九六年卒) 井上 信 隆

「井上は魚の食べ方がうまいなあ。これまで会った学生の中で一番きれいに食べている」これが橘先生に初めて褒められた場面である。先生の研究室は、その構成メンバーが旧石器〜縄文時代の専攻学生で占められていたのだが、私が学生の頃は、「考古学」専攻の学生は、対象の時代や分野を問わず、まず橘研究室の門を叩き、実測など調査方法の基礎を学ばせてもらうことが通例であった。

古墳時代、特に「終末期古墳」を研究の対象としていた私も、例に漏れず先生の研究室に在席させていただき、旧石器専攻の先輩方に考古学の基礎を学んだ。大学入学後、最初に迎えた夏休みに、「橘研究室」で大野川流域に分布する旧石器時代の分布調査及び流紋岩を主体とする石材調査に参加させていただいた。泊まりがけの調査では、旧石器のスペシャリストである先輩方に同行させていただく形で旧石器専攻の同輩と参加した調査の中では、分布調査も行われ、先輩方は立ち寄り寄る遺跡ごとに細石刃や剥片などを拾い上げ、その度に歓声があがる。石器と「ただの石」の区別がようやくできるようになった私とは完全に隔絶された空

気があった。

ましてや先生からみれば、私は「足手まとい」ではないのか？とさえ思いながら初日を終え、宿に着いた。宿の夕食は参加者全員による今日の「戦果報告」の場を兼ねた様相を呈し、私はそれを聞きながら焼き魚の上で箸を動かしていた。冒頭の言葉はこの時に橘先生から発せられたもので、この一言により、旧石器の専門的かつ論理的な話から、焼き魚の話に変わり、先生が私に、「焼き魚をうまく食べる方法を皆にレクチャーしろ！」と言われ「骨はこうやって」という話をする、先生をはじめ、これまで怪訝な顔をしていた先輩方も「本当にうまいなあ」と褒めてくれた。この一件以降、先生自ら遺物を手に取ってご教示いただき、先輩方も「井上、こっちに石器があるぞ」と導いていただくなど一気に距離が縮まり、無事に調査を終えた。この調査を契機に私自身、旧石器に興味をもち、研究室の先輩方にも積極的に質問し、また知識が蓄積される喜びを味わうことができた。

この年、『駒形津室追遺跡の構造論的研究』という、旧石器の製作過程の復元を試みた画期的な報告書の作成に参加させていただき、その一節の執筆を担当させていただくことになった。報告書の内容はかなり専門的な内容であり、成人式の出席を断って報告書作業に携わる先輩の姿をみて、正月こそ帰省したもの、冬休み返上で先輩方の手伝いを行った。この時、研究室内では独特な緊張感が漂っており、先生に言葉をかけることも躊躇するような状況であった。そのような中、帰省の際、土産に渡された「干し柿」を研究室に持参した。一本の縄に十個ほど吊るして干したもので、二〜三本を研究室の壁にぶら下げていた。物珍しそ

うに先輩方が眺めていると、険しい表情をした先生が扉の向こうから出てきて、干し柿をみた途端、「おお、なつかしいなあ」というのが早いか一つを取って口に運んでいた。「これこれ、この味。子どものときに食べたそのままの味だ」と満面の笑みをうかべて懐かしそうに微笑んだ。みると両手に干し柿をにぎっている先生の姿があった。「これは全部私のものだ。だれも食べるなよ！」と笑いながら全ての干し柿の縄を握りしめていた。その場にいた全員が笑いに包まれ、数分前とは全く違った和やかな雰囲気にも包まれた。その後、先輩が「井上の家で作ったものです」と説明していただくと、「これはいい！毎年もってきてくれ」と肩をたたかれた。報告書の最終段階の時期であったため、その後はいつも通り険しい表情での確な指示を与える先生の姿がみられたが、その手にはしっかりと干し柿が握られていた。

このように一年時に先生から明確に褒められたのは、「食べ物」に関することであったと記憶している。今思えば、能力も経験も浅く、研究分野も異なる一回生を研究室のメンバーとして溶け込ませるため、「とりえない」学生の長所を「褒めて伸ばす」先生なりの配慮や愛情の表れであったと感じている。このような雰囲気と報告書の執筆を経験したことにより、さらに旧石器の研究にも打ち込むようになった。

二年時には、橘先生、友永先生が同行し、中国、台湾、香港の史跡を巡るツアーに参加することができた。この研修ツアーで私は、一生忘れられない思い出を経験することになった。橘先生と周口店遺跡に立ったのだ。先生も興奮を抑えきれない様子で、他の参加者にはおかまいなしに二人で「表採」に没頭し「井上、やっぱり周口店はすごいなあ」と興

奮気味な満面の笑みを浮かべた先生の顔が昨日のように思い出される。

卒業して、故郷の町役場に就職し、博物館業務の傍ら様々な発掘調査に携わるようになると「井上が担当した遺跡は、必ず旧石器が出る」と揶揄されることもあったが、「それは出土遺物を細かくみる丁寧な発掘をしているという誉め言葉だ。」と研究室の先輩から言われて、旧石器を見る目を養ってくれた先生の影響の大きさを改めて感じた。その後も「干し柿」持参で研究室にお邪魔したり、先生が北九州方面に来られた時には必ず連絡をいただきお会いする機会があった。

先生が明治大学から九州の黒曜石器の出土事例に関する調査を依頼された際、先生から東九州地域の調査を担当してもらいたいという連絡を受けた。郵送された調査文書に添えられた文面には、「一番思い出深いこの報告書を贈る」と記されており、「駒形津室追遺跡の構造論的研究」の報告書が同封されていた。

数年前、二〇メートルクラスの墳丘をもつ古墳の発掘調査を担当した際、その墳丘盛土からナイフ形石器、台形石器とともに珪化木を素材とした船野型細石刃核が出土した。この発見によりこの地域の歴史が一気に一万数千年さかのぼることになった。地元の方々が「地域の宝だ！」と喜ぶ姿を見て、一点の石器の発見からその地域の歴史が変わる喜びと感動を改めて感じることができ、改めて先生から教えていただいた知識の重みを感じることができた。そしてその知識を生まれ故郷の歴史の再発見に還元することが先生に育んでいただいたことに対する恩返しだと感じている。

追悼文

橘先生との思い出

史学科三期生(一九九七年卒) 林 潤也

私が卒業したのは一九九七(平成九)年。気付けば四半世紀が経とうとしている。学生時代、橘先生の下で考古学を学び、貴重な経験をさせていただいた。少しではあるが、先生との思い出を振り返ってみたい。

牟礼越遺跡調査の頃

橘先生と親しくさせていただいたきっかけは、大学二回生から参加した牟礼越遺跡の発掘調査であったと思う。牟礼越遺跡は、大分県三重町(現在の豊後大野市)に所在する旧石器時代から縄文時代の遺跡であり、特に黒色土層下位のローム層から出土した石器群は、後期旧石器時代初頭の資料として高く評価されている。私は三度調査に参加したが、なぜか二回生の時から可愛がってもらった。宿での夕食の時には隣の席と呼ばれ、また先生の車で長距離移動する際には「俺が居眠りしないように、面白いことを話せ」と言って助手席に座らされた。不真面目な私にとって、思い出すのは調査成果ではなく、様々なハブ

ニングやイベントなどのサイドストーリーばかりであるが、先輩・同級生・後輩、そして橘先生と寝食を共にした時間は、今でもかけがえのない宝物である。また初めて報告書を執筆したのも牟礼越遺跡であった。僅かなページ数の概要報告書ではあったが、三回生の私にとっては貴重な経験であり、機会を与えていただいたことに改めて感謝したい。

牟礼越遺跡の発掘調査以外では、天瀬町(現在の日田市)や姫島(大分県姫島村)での確認調査・分布調査も懐かしく、対馬への資料調査も印象深い。対馬の資料調査は、長崎県峰町(現在の対馬市)佐賀員塚出土の黒曜石製石器の分析を目的としたもので、橘先生の研究姿勢や着眼点を学ぶ機会となった。また対馬での夕食は、地鶏料理三昧だったが、先生は鶏料理が苦手であったため、ずっと苦笑いしながら「どんどん食べろ」と私の皿に入れてくれた。

卒業論文の担当教員も橘先生であった。私のテーマは縄文後期土器であったが、細かな内容の指摘ではなく「たくさん資料を実見し、今後に生かすように」という指導をよく覚えている。

卒業後の交流

一九九七(平成九)年の卒業後、先生にお会いする機会は少なくなっってしまったが、何度か先生の研究室を訪ねたり、仕事のお手伝いをさせていただいた。その間、お忙しい時期や心労の絶えない時期があったことは承知していたが、以前と変わらない対応が印象的であった。

また二〇〇五(平成一七)年には、結婚式に出席していただいた。妻も学生時代に橘先生にお世話になったこともあり、祝辞をお願いす

ることになった。先生は「苦手だから」と言いつつも、快く引き受けてくれた。その数年後には、妻と息子（当時二歳）を連れて大学にお邪魔した。その時に「また来ますね」と言って部屋を出たが、大学でお会いしたのも、子供を連れて行ったのも最後となってしまった。息子は中学生となった。時の流れを痛感するとともに、約束を果たせなかったことを後悔している。

最後の会話

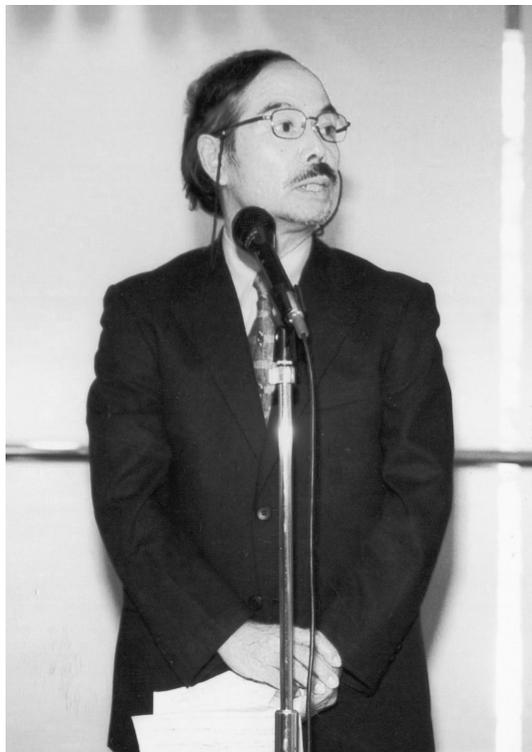
先生と最後にお会いしたのは二〇一四（平成二六）年九月、熊本市で開催された九州旧石器研究会第四十回記念大会の会場であった。同研究会の初代会長であった橘先生が記念講演を行うということで、旧石器時代研究に関心のない私も参加した。演題は「九州旧石器時代研究の展望―研究会―小史と後期旧石器時代の地域性―」（『九州旧石器第一八号』に収録）。先生の講演を聞いたのは、学生時代以来であったろうか。最後の機会になる予感もあり、一番前の席で聴講した。講演の前半については、いつもの声（低くてよく通る声）ではなく少し違和感を覚えたが、後半になるにつれ、いい声で楽しそうに講演されていた。記念講演後の休憩時間に先生に声をかけた。私が「聞いていること気づきましたか？」と聞くと、「当たり前だろう。一番前の席でニヤニヤしている奴がいるから話しづらかったじゃないか」と笑っていた。この会話が私にとって最後の思い出である。

訃報

二〇一九（令和元）年、その訃報は突然であった。後日、人づてに墓所を聞き、お参りさせていただいた。初回は同窓生（同級生と後輩）と、その後家族で二度お参りした。生前よりも頻繁に足を運ぶ私を見て、先生は苦笑いをされているかもしれない。

訃報の後、先生と親しい方から、『大野川流域における細石器文化の研究』（二〇一七年）を送っていただいた。同書は、橘先生の最後の著作であり、四〇年以上前に発掘調査した小牧遺跡（豊後大野市）の報告と併せて、ライフワークであった大野川流域の細石器文化研究を総括したものである。執筆当時の体調について知ることとはできないが、厳しい状況の中、覚悟を持って取り組まれていたことは想像に難くない。また、同書の「おわりに」を読むと、先生の「らしさ」と「想い」を感じる。そこには、自身の総括研究に関する言及はなく、小牧遺跡の調査・整理に関わった方へのお礼、報告が遅れたことへのお詫びと反省が繰り返して述べられている。全体を通して読んでも、派手な言動を好まず、堅実な研究姿勢であった先生の面影を随所に感ずることができる。

橘先生が亡くなって二年が過ぎた。もし時を戻せるならば、もう一度だけお会いし、一言「ありがとうございます」と伝えたい。さらに叶うならば、少しのお酒を飲みながらゆっくりと話がしたい。その場所は、牟礼越遺跡調査時の定宿「三国屋旅館」であれば最高である。



2005年 林さんの結婚式にてスピーチされる橘先生
(林さん提供)



下村先生

2005年 林さん結婚式にて (橘先生は前列左) (林さん提供)